

地域の伝統文化を受け継ぐ人々 だんじり(地車)のひみつ

中学年の社会科では、地域の伝統文化や伝統工芸について学習をします。その中でも、子どもたちに楽しく身近であるのは「祭り」です。祭りは、元来豊作や無病息災等を願い「祭る」ものですが、時代の変化とともに娯楽としての要素が強まる傾向にあるようです。さて祭りと言えば、まず「だんじり」があげられます。だんじりは、主に近畿地方・中国地方・四国地方などの西日本の祭礼で登場し、「曳きだんじり」と「担ぎだんじり」の2種類に大別されます。だんじりの漢字表記は様々ありますが、「地車(だんじり)」で表される曳きだんじりは関西が中心です。地車は約900台現存していますが、曳行形態、構造、装飾などは実に多種多様です。尼崎もだんじり祭りが盛んで、30台弱の地車が活躍しています。

伝承技術と伝統文化

地車は大小2つに分かれた独特の破風屋根を持つ曳き車で、多くの彫刻が組み込まれ、刺繍幕や金の綱、提灯やぼんぼり、旗・幟などの装飾が施されています。主に樺(ケヤキ)を用いて造られており、コマには松が用いられます。金具の装飾など以外には釘は使用されておらず、宮大工の技術が用いられています。部材の一つひとつが、日本の伝承技術の粋をもって丹念に造られています。地車はそれらの集大成です。そしてそこに「祭り」という伝統文化、人々の願いと活動が加わります。例えば地車を新調や改造した際は、その出初に「入魂式」が執り行われます。地車に魂を入れるわけです。このように、地車(ハード)と祭り(ソフト)をもって「だんじり祭り」とし、伝統文化は脈々と受け継がれています。

下地車と上地車

だんじりは岸和田が有名ですが、尼崎のだんじりとは何が違うのでしょうか。大きな違いは、高速で走行し停止せずに辻を一気に回りきる「やり回し」が岸和田だんじりのウリなのに対し、2台のだんじりが向かい合わせで勝負する「山合わせ」が尼崎だんじりのウリです。そして、活動形態の違いだけでなく、地車本体の構造にも違った特徴があります。

☆岸和田…かつて岸和田城下の北町が地車を購入したものの、城門を潜ることができなかったために改良を重ねたものが現在の岸和田型の地車です。つまり、岸和田型は特別な事情から独自の進化を遂げたわけです。腰廻りには、舵を取る「担い棒」はなく、四段に積み重ねた彫物が施されています。舵を取るために前後に舵艇子を後付けする「下地車」と呼ばれる類の地車です。上地車と比べると大きく重く、安定度も高くなっています。大きいものでは高さが4m弱、重さも5tにもなる上、精緻な彫刻で埋め尽くされているため、建造費はなんと1億円を超えてしまいます。

☆尼崎…上地車と呼ばれる地車を運用しています。岸和田型を除く全ての型は、このタイプの地車に属します。上地車には「担い棒」「肩背」などと呼ばれる枠が付いています。「山合わせ」は、双方の地車がウイリーのようにして前部を上げ、担い棒を突合せて相手の棒の上に被せたほうが「勝ち」です。いわゆるケンカですが、市民祭り参加の以降は、「山合わせ」という呼び方になりました。



下だんじり

舵を取る担い棒は無い。前後に舵艇子を後付け。

写真はWikipediaフリー図版より掲載



上だんじり

担い棒がある。

地車に見られる他地域の面影

地車は伝承技術の賜であるが故、新造には数百万～数千万～億単位の建造費がかかってしまいます。費用の捻出には、旧の地車を他地域に転売して資金に充てています。また、相手も旧の地車を購入することで、新造するよりもかなり安く済みます。旧の地車を購入した地域では、その地の仕様(いわゆる〇〇型地車)に合うように改造します。しかし地車は地域によって多様で設計や装飾が異なるため、改造は費用的にも、構造的にも、技術的にも限界があります。ですから、尼崎の地車も各々前の地域の特徴を残しています。

貴布祢神社には8台の地車が集いますが、原型は大阪型、北河内型、住吉型、堺型などまちまちです。かつては、中在家の五丁町だけでも9台の地車を保有していましたが、焼失や売却、腐敗等で今は1台だけになってしまいました。初島大神宮には7台が集いますが、堺型が多いです。塚口神社には5台が集い、堺型2台、大阪型2台、淡路島から1台となっています。これらの地車は江戸から明治にかけて造られたものがほとんどで、彫物には唐獅子、鳳凰、鷲、松、梅福仙人、青龍、牡丹、麒麟、竹、虎、猿、波濤、飛龍、張飛翼徳、関羽雲長、通玄、仙人、羽柴秀吉、力士などが見られます。

台頭する岸和田型 地元で姿を消しつつある堺型

岸和田のようにメジャーで資金の豊富な地域では、市街地に加え新興住宅地においても新調される地車が多く、独自仕様での運用が可能です。そして旧の地車は転売され、結果的に岸和田型が勢力を伸ばすことになります。近隣の堺や泉州においては上地車に替わって、岸和田型そのままの下地車(無改造)が勢力を伸ばしています。伝統ある堺型はその本拠地の堺では、もう殆ど見られなくなっています。堺では「やり回し」のできる下地車・岸和田型の浸透によって、祭りの活動形態までも変わってきているのです。伝統ある堺型を何故断ち切るのでしょうか? …祭り文化を大きな目で見れば、大和川を挟んで以南は泉州文化圏、以北は浪速(大阪)文化圏に分かれます。したがって堺の人達が岸和田型を導入することは、同じ文化圏に属する上ではそれ程抵抗がないものと推察します。人気のある「やり回し」を取り入れることは、商人の町、自治都市として先進性や合理性を誇り、よりよいものを積極的に取り入れてきた堺の歴史、気質に基づくものとして成程と思います。歴史と伝統文化には深い関連性があるようです。

伝統、伝承とは…

だんじり祭りに見られるように、伝統や伝承は、その土地の地理風土・歴史文化・暮らしや願いに基づき、かたくなに守ったり、融合や影響したり、独自の進化を遂げたり、様々な形で続いていくものと感じます。また、少子高齢化や時代の変化に伴って消え去るものもあります。廃村になった地域や限界集落では、祭りを始めとする様々な文化や暮らしが消えています。尼崎に住んでいるとあまり実感はないかも知れませんが、兵庫県でも内陸の山間部では現実的な状況です。

さて皆さんは伝統や伝承をどのように考えたり、感じたりしますか。人によっては、伝統や伝承という言葉聞いた時、想いや時空をイメージし、不思議な感覚に包まれたりもするようです。私たちの職場である「学校」をふり返った時、学校(の伝統や伝承)は、地域性や歴史に基づくのはもちろんのこと、働く私達や学ぶ子ども達も関わっています。その一人ひとりが校風の構成者であると共に伝承者でもあります。赴任や入学あれば異動や卒業あり…毎年毎年、少しずつメンバーが入れ替わり、バトンタッチしながら受け継がれていきます。長いスパンで見れば、全ての人が入れ替わることになりますが、学校という存在自体は続いていきます。地域もまた同様に、人々の入れ替わりや世帯の継承、世代の交代があります。日頃は見えない気づかない中にも、私達もまた歴史文化の伝承者(の一員)かもしれません。

参考文献:★だんじり図鑑-浪速のだんじり博物館 ★山車・だんじり悉皆調査 ★地車型分け図鑑 ★Wikipedia「だんじり」